



鶴岡市 致道博物館

梅の香昇る 洋館へ蒼天へ

 庄内銀行

Cradle 3 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2024 March/April  
令和6年3月1日発行 第14巻4号(通巻82号)

発行/ Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)会社 出羽庄内地域デザイン 電話0235(64)0888  
制作/ Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3(有限)会社 コーポレーション 電話0234(41)0012

美しくつかしい、日本をのせて。

# Cradle

特集  
花の種まく  
つくり手たち  
庄内憧憬  
新井紀子  
随筆家

「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

3

2024 March/April  
TAKE FREE  
NO.82



風になった新井満は庄内を訪れ月山に登り、先に旅立った森敦さんと楽しく花見をし、組曲『月山』をうたっていることでしょうか。

## 天の夢千の風

### 新井紀子

森敦著『月山』、この一冊の本が私たち家族にとって庄内とのご縁の始まりでした。新井満はこの本を読んで大変感動し、作者である森敦さんのところへ会いに行つたのです。森敦さんは急な来訪にもかかわらずたいそう歓待してくれました。

翌年の夏、新井満は森敦さん訪問の折、小説『月山』の冒頭に曲をつけてお土産にしました。森敦さんは驚き、喜んで友人知人に広めてくれたのでした。新井満作曲の組曲『月山』の誕生です。

昭和56年、旧朝日村の注連寺に森敦さんの文学碑「月山すべての吹き寄るところ これ月山なり」が建立されました。その除幕式に新井満は招かれ組曲『月山』を披露しました。この除幕式の幕は切つて落とされるのではなく、小説『月山』の中に出てくる祈禱簿で作られた蚊帳のように空へと上がっていったのです。空の上で

ふわりふわりと浮かぶさまは、天の夢のようだったよと新井満は驚いていました。この集まりが第一回目の月山祭になったのです。

この年から毎年、八月最後の土曜日に月山祭が開かれるようになりました。注連寺境内でゲストの方と森敦さんの講演。夜になるとお堂の中で「森の花見」が始まるのです。新井満も毎年参加してこの日のために作られただちや豆をたらふく食べていました。子どもたちが小学生になると、新井満とともに私たち家族も参加するようになりました。月山祭実行委員会の方たちが注連寺への道すがら、庄内の名所をいろいろと案内をしてくれます。必ず行くのが湯殿山です。岩から吹き出るお湯がご神体です。ご神体には裸足になってお詣りをします。子どもたちはお湯が熱い熱いと言って大騒ぎです。月山へも案内していただきました。麓から見るとよりずっと険しく岩が

ごろごろしていました。庄内空港が開港すると、湯野浜温泉にも行くようになりました。海水浴をして日本海に落ちる夕陽を堪能しました。松ヶ岡で戊辰戦争後の開墾について学び、たくさんのお雛様にも出合いました。新井満が『鳥海山』という歌をつくったときには、遊佐町にも足を延ばし日本海を眺めました。

新井満は月山祭に参加すると必ず「月山はどこかなあ」と地元の方々に聞き、死者が行くという月山を探すのでした。

風になった新井満は庄内を訪れ月山を探すことができたのでしょうか。毎年、月山祭で見たいのですから間違えることなく登ることができたと思います。先に旅立った森敦さんと楽しく花見をし、組曲『月山』をうたっていることでしょうか。



森敦生誕100年祭(2012年9月8日)で組曲『月山』をうたう新井満氏。  
森敦文学碑除幕式に「天の夢」の幕が飾られた。

あらい・のりこ／随筆家。1947年東京生まれ。東京農工大学卒業。1971年新井満と結婚。新井満との共著に「ハイジ旅行ふたりで行く」「アルプスの少女ハイジの旅」「木を植えた男を訪ねてふたりで行く南仏プロヴァンスの旅」「白泉社」「ピエーラ・ビット旅行ふたりで行くイギリス湖水地方の旅」(河出書房新社)がある。1996年から2020年まで、ラジオ番組「心のともしび」(KBS京都制作)に毎月エッセイを寄せていた。現在、北海道大沼で羊を飼って暮らしている。



特集  
花の種まく  
つくり手たち

陽ざしであたためられた土が匂い立つと、  
たちまちのうちに、水に、風に、空に、雲に、夕焼けや月や星にも春が兆すのを  
私たちは庄内にいて感じることができます。  
今、庄内でそれぞれの表現をする、4人のアーティストたちも。  
作品に命を吹きこむこと。それはまるで冬から春へ生命が息吹くような、  
種が花へと育つような、ここに生きて何かを生み出すことの美しい結実。  
喜びあふれる新しい季節に、4つのものがたりをお届けします。

トビラ写真=下村しのぶ

## 花の種まく つくり手たち



下村しのぶ

北海道出身。写真家。ポートレート、雑貨や建築物まで。雑誌、書籍、広告などで幅広く活躍。写真展も定期的で開催。著書に『東京レトロ建築さんぽ』『東京モダン建築さんぽ』（共著・エクスマレッジ）、『おばあちゃん猫との静かな日々』（宝島社）がある。  
<http://www.kanaria-photo.com/>

布団から飛び起き、早朝のルーチンすら焦れつつ、急いで一通りの準備を終えるとカメラを抱え外へ飛び出していく。昨日までは眠っていた土地が目覚める瞬間を撮りたい。

季節の変化が緩やかな場所で生まれ育った私は、5年前この土地に越してきた。庄内で暮らす初めての春には心底ビックリした。

たった数日で、国や世界が変わったのではと思うほどだ。

グレーの景色は、極彩色の光り輝く世界へ。

冬の間積もった雪が溶ける。気温が上がると土や木から水蒸気が上がる。

スギナに朝露がたまり、光の粒がつく。まるで春のクリスマスツリーみたいだ。

バラは柔らかな日差しの中で、風に吹かれながらゆらゆらと揺れている。

椿や春山茶花が咲き乱れ、花が天から降り注いでくる。

そういえば小さな頃、絵本の中でこんな光景を見たことがある。

草木に顔ができ、喜びの歌を歌う。

本当にこんな世界があるんだ。

夢中になって撮影をしていると、あちらこちらから人が出てくる時間になる。

散歩の人、畑の人、子供の声が聞こえる。みんな春を待ち侘びてたんだ。

ご近所さんが声をかけてくる。

「冬の間は何をしていた?」「楽しく冬眠をしました」「そうかそうか良かったのう」と、他愛もない話をして別れる。

何処にもない特別な場所。庄内の春がたまらなく好きだ。

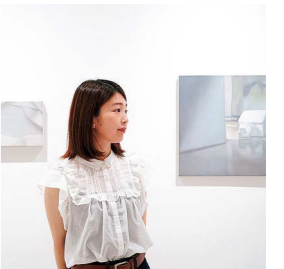


Shimomura Shinobu



1. Nightfall/2021/oil on canvas/24.2×33.3 cm  
 2. When Spring Comes/2021/oil on canvas/22×27.3 cm  
 3. Around the Clock/2022/oil on canvas/65.2×91 cm

## 花の種まく つくり手たち



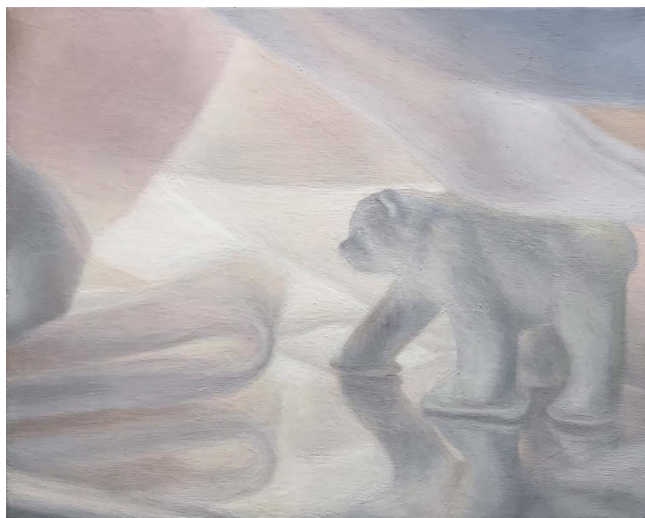
### 福濱 美志保

東京都出身。画家。武蔵野美術大学油絵学科卒業。手のひらに乗るような小さいモチーフを風景に見立て、大画面に引き延ばす油彩作品《Grandscape》シリーズを軸に制作。郷愁を感じさせる静謐な空間を、油彩の筆触だけに宿るリアリティや存在感で表現する。近年の主な受賞に美術新人賞デビュー2023グランプリ、第7回星乃珈琲店絵画コンテストグランプリ、Idemitsu Art Award 2023入選、FACE展2021入選(SOMPO美術館)など。庄内では2021年に「2号室」、2023年に日本海総合病院にて個展開催。

庄内に暮らして何度目かの春がやってきます。山や海など多くの自然に囲まれてこの土地では、季節が巡るのをはつきりと体感できます。幸せて貴重なことだと感じています。今年はやや暖かく雪も少ないですが、庄内の春は長い冬と隣り合わせで、冬の厳しさが春の訪れを際立たせます。冬は曇り空に覆われた日が多く、雪が降り、滝が凍り、冷たい強風が吹き荒れ、出かける人々が極端に少なくなり、夕方の早い時間にはぼんやりと暗くなつてきます。それがある日、ふと気がつくと外の空気が暖かくなっていて、あたり一面からポタポタという雪解けの水音が聞こえてきます。初めてその光景を目の当たりにした時は、今まで自分

が物語で見聞きしてきたような春の訪れを体験することができ、とてもうれしかったです。海に沈む夕陽を見られるのも庄内の大きな魅力です。夕陽の沈む位置が季節ごとに変化し、春になるとだんだん北の方に移動していきます。子どもの頃に習ったことではありますが、実際に目にするると丸い地球に住んでいることが実感でき、日本海を眺めながらなんだか雄大な気持ちになります。私は普段、小さなモチーフを風景に見立てた油絵を制作しているのですが、庄内に越してきてから夕陽の色の鮮やかさ、豊かさ、心を動かされる、現実の風景もときおり描くようになりました。春から夏にかけては天気もよく、夕陽の色彩が最も美しくなります。優しい黄色、黄緑、水

色。時には激しく強い赤。こんな色が描けたらと、日々の制作に刺激をもらっています。また、春といえば山菜です。今まではあまり食べる機会がありませんでしたが、庄内ではさまざまな場所で手軽に手に入り、飲食店でもよく季節の一品として出されています。天ぷらに塩をつけて食べたり、ごまあえにしたり、春の味覚を楽しんでいます。他の野菜にはない山菜の苦味がたまらなくおいしいです。特に好きなのはアマドコロ。まだ自分で山菜を採ったことはないのですが、いつか出かけてみたいです。澄んだ青空に鳥海山の残雪が映える、庄内の春。みなさんはどんな庄内の春を楽しんでいるでしょうか？

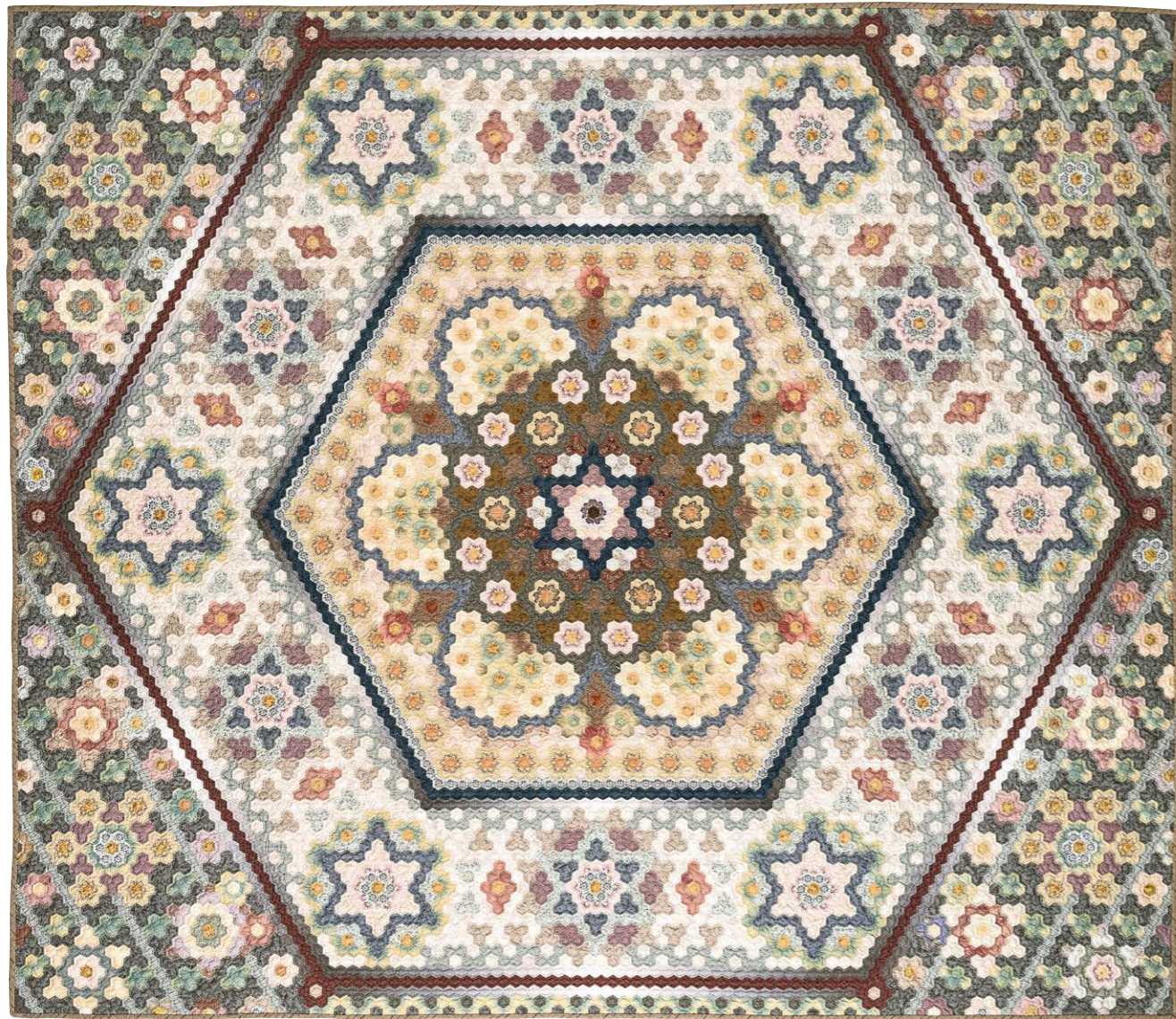


2



3

Fukuhama Mishiho



1. 花の季／2007／200×172cm  
 2. 波一遥かなる潮さい／2021／130×185cm  
 3. 孤島の花—トビシマカンゾウ—／2023／146×112cm

## 花の種まく つくり手たち



菅原 真理子

酒田市中町生まれ。実践女子短大被服科卒業。帰郷後、実家近くの港屋時計店に嫁ぐ。3人の子育て中にキルトに出会い、仙台市の小西香代子氏、東京都の升井紀子氏に師事。1988年、父の井山計一さんが営む「ケルン」2階で教室「キルトスクエア」を主宰（現在は酒田市総合文化センターで開講）。各地での個展、国内外での入賞多数。2023年、松山文化伝承館でご長女の佳奈さんと「布と糸で織りなす母娘展」を開催。

「1年をかけて1つの作品を作るので、一つ一つの作品にいっぱい思い入れがあります。『この頃は母の介護をしていたなあ』なんて思い出も。キルトはいつでも私の癒やしでした。布に触って針を持っていると心が落ち着いて。私にはキルトがあつて幸せだって、今まで何度も思いました」。キルト作家の菅原真理子さんは、地元酒田を制作の拠点に、その作品は海外の展覧会などにも招かれて、和キルトの世界を広く伝えてきました。

菅原さんがパッチワーク・キルトに出会ったのは1980年代、日本にブームが起こる少し前のことでした。家事と育児をしながらキルトの学校に通い、教室の講師も務めながら制作を続けてきました。『花の季』を作るあたりで家事や子育てがひと段落して、その頃から故郷のテーマを取り入れるようになりました。数年前、雑誌の取材を受けた際、同席した本間美術館館長の田中章夫さんから、「真理子さんの色彩は風土に培われたものです」と言ってもらったことが心に残っているそう。「私が育ったのは街中ですが、小さい時は海水浴やスキーに行つて、高校の山岳部では山の四季にふれて、今は近くの日和山に行つて海を眺めて、そんなふうにごく近くなりました。私は中間色から少し影のある色合いが好きなんです。それはきっと、海あり山あり川あり、庄内の素晴らしい自然の色合いなのだと思います」。

菅原さんの近作は、トビシマカンゾウや日本海などのオリジナルパターン。「酒田西高の同窓会で、今の校歌を覚えて歌ったんです。歌詞の『耳を澄ませば 遥か潮騒』の一節が印象的で。日本海は荒波のイメージがありますが、私がよく見ていたのは春と夏の光る波。一般的な日本海の風景ではないかもしれないけど、私の海はこれなんだよと思って作りました」。

菅原さんにとってキルトは、自分を表現できるものであり、「家族のために作るもの」。それはキルトが生まれた原点で、菅原さんの作品には家族に作ったものも多くあります。「キルトを続けられたのは、何よりも家族の協力があったからです。ひと針ひと針、時間をかけてぬくもりを伝えるのもキルトの魅力だと思っています」。

昨年は自身のキルトとご長女の糸掛けアートの初の母娘展が叶った菅原さん。会場を訪れた人からは「2人の色合いが似ている」との声が多く聞かれたそう。母と娘、家族、一緒に過ごしてきた時間の色彩はその人の中に生き、表現することを通して、他の多くの人たちにも彩りを分け与えてくれます。

取材 | Cradleの編集部



2



3



1. composition. w (写真: 境瑞貴)
2. composition. g
3. composition. letter

1
2 3

「大鳥の人たちが春になって熊狩りに出始める頃、見える景色が雪の白と山の新緑が重なってすごくきれいなんですよ。嬉しいのはそれが生活に落ちていくことです。新緑が見え始めたな、そろそろあの山菜が出てきて食べる時季だなんて」。現代アーティストの桃与さんが鶴岡市大鳥で暮らすきっかけとなったのは、鶴岡市出身のご主人との出会いでした。「夫が大鳥に住みたいと言った理由が『美しい世界を感じながら生活したい』という明快なものでした。確かに、都内で美しいものを見ようとすれば自分で拾いに行かないといけない。でも大鳥は生活の中に美しさがあって、それを共有しながら生活するのはいいなって」。

桃与さんの作品は、自然を主な題材に、映像と絵画という2つの媒体を用いて表現しています。そこに現れるのは時の流れ、「時間軸」です。「山の暮らしは長大な年数を感じられるもので、例えばおばあちゃんたちが山菜を採って保存する術も長い年月をかけて伝わってきたものですよ。その技術も、山と人が何十年、何百年単位で共存するように考えられていて、私もその時間軸で作品を作りたいなと思ったんです。50年後、100年後に何を残すのか。その意識が生まれたのは、大鳥に住んでからですね」。

いたものの命をいただくことが身近になって、その上で成り立つ自分の命を粗末にはしていないという感覚にやっとなれたというか。その作品を、自分の遺書としてここに置きますというのを明示したんです。死に向かうのではなく、生きていくための意思表示として。何千枚ものポストカードに言葉を書き、映像を重ねた波のようなインスタレーションは、生命力みなぎる春に生まれた、生と死の間の今現在を感じさせる作品でした。「春の樹々は『もえるような緑』って言いますよね。私には『萌える』よりも『燃える』なんです。新鮮な緑の美しさ、その生には限りがあった命を燃やしているような。そういった命の巡りを感じるのも、私も大鳥の自然の中でそこに住む命の一つとして感じているからかもしれません」。

取材 | Cradle編集部

## 花の種まく つくり手たち



### 桃与

山梨県出身。武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業。現代アーティストとして「映像絵画」の制作の他、映像作家としても活動。2019年、ご主人の伊藤卓朗さん(現NPOやまいる代表)の帰郷にあわせて鶴岡市大鳥に移住。近年、酒田市の旧阿部家、鶴岡市の黒川能の里 王祇会館などで個展を開催。地域の伝統芸能の映像記録も手がけ、現在、王祇祭のドキュメンタリー映画を制作中。3/16~20、鶴岡駅前マリカ広場で映像と絵画のインスタレーションを展示。

2022年春に発足した  
酒田クラフトビールプロジェクト  
2年の歳月を経てついに  
この春、ペールエールをはじめ  
定番4品が販売開始

## 酒田トラディショナルビールの ペールエール

今年2月末、庄内初のクラフトビール醸造所による商品が発売された。醸造所は酒田市のパイプ・ラインエンジニアリング株式会社敷地内。同社代表の池田和男さんが、クラフトビール構想を温めていた飲食店経営者の安藤力人さんと美容室経営者の勝田貴美さんから相談を受けたことが、今回の実現へとつながった。

クラフトビールとは小規模な醸造所がつくる多様で個性的なお酒のこと。ブルワーと呼ばれるビール職人が、モルト（麦芽）、ホップ、水、酵母をベースに副原料も加えながら自由な発想で作るため、レシピは100種以上ある。第1弾の「ペールエール」は、同社のブルワー2名と池田さんら関係者が理想の味を目指し、東京の先輩職人のアドバイスを受けながらレシピを作ったもの。4種のホップによるさわやかな柑橘系の香りと、副原料の「つや姫」によるクリアな味わいが特徴で、今年1月に開催した100名参加のお披露目会でとても評判が良かったという。

第1弾に続き他の定番3品も次々発売し、その後は地元特産物を副原料にした季節限定品にも挑戦していくとのこと。ブランド名「酒田トラディショナルビール」には「酒の酒田」の伝統に加わっていききたいの思いが、商品コピー「うれしい、たのしいをわかちあおう」にはクラフトビールを醸す楽しさやおいしさを共有し、地域に笑顔の輪を広げていきたいの思いが込められている。バリエーション豊かなクラフトビールの世界に、庄内の食のポテンシャルが組み合わさるとどうなるのか。その可能性はきつと無限だ。



酒田トラディショナルビール(愛称サカトラ)の定番商品はペールエールの他、白ワインのような香りのホワイトエール、ホップの苦味が特徴的なIPA、モルト感とコクが楽しめるスタウトの4種類。地元お土産店の他、県内の酒店やスーパーでも順次販売予定。

酒田トラディショナルビール ☎ 0234-28-8826

✉ sakatacraftbeer@pipe-line.co.jp

(取材・文 長谷川結)





絵ろうそくとお雛様

店の奥では、桃の節句やお彼岸に向けて、手のひらにおさまるくらいの大きさのろうそくに、梅や蓮の花が職人たちによって描かれていた。筆先に色をとり、丁寧に絵付けしていく。筆の染料の乗り具合は日によって変わるといふ。和ろうそ

らふそくの花絵花色春待てり

―神戸サト

時は、市内に二十数軒のろうそく屋があり、職人たちは自分の作ったろうそくを献上品してもらおうと、その技と美しさを競っていた。富樫ろうそく店の先代が描いたという龍神や風神雷神も、どれ一つとっても同じものではなく、一筆一筆に職人の技が息づいている。

山王日枝神社からほど近いところにある富樫ろうそく店。見たこともないような大きく白いうそくに、黒川能の当屋に奉納する人の名が筆で入れられていく。2月1日の王祇祭では毎年飾られるものだという。その一方で、大きなろうそくとはまったく違う色鮮やかなたくさんさんの絵ろうそくが、一足早く春が来たかのように店内を明るくしていた。



職人による絵付け

庄内俳句紀行

立春の色をのせ  
絵ろうそくを描く

雪がしまく一年で一番寒い頃  
神事として五百年以上前から続く  
王祇祭で大きなろうそくの炎が揺らぐ。  
伝統的な和ろうそくに魅せられ  
鶴岡のろうそく店を訪ねた。

季語

立春

二十四節気の一つ。その前日が節分。「春立つ」ともいふ。

海狂ふ冬も終りの絵らふそく

―斎藤梅子

鶴岡の絵ろうそくは、江戸時代の中頃から作られ、日本一とまで称された。参勤交代の際には酒井家から幕府に献上されていたという。その特徴は、「花紋燭」とも呼ばれる源氏車、蓮華、花模様を色絵で描いた絵付の和ろうそくである。当

蠟燭のにはふ雛の雨夜かな

―加舎白雄

そくの歴史は古く、蠟の原料には樫の実芯にはイ草の茎を使う。この和ろうそくはどんな炎を見せてくれるのだろう。

和ろうそくは、その大きく揺れる炎に神事、仏事、さまざまな機会で人々の祈りや願いを灯してきた。絵ろうそくは、その描かれた絵に想いをのせてきた。今、時代の変化とともに、絵ろうそくの使い方変わりつつある。水に浮かべる可愛いらしい形のものもあった。

虹彩に燭の絵灯る雛の家

―あべ小萩

間もなく訪れる桃の節句のお雛様に絵ろうそくを飾ってみるのもいい。普段の食卓に、おもてなしの席に、自分で描いた絵ろうそくを灯すのも素敵な時間となるだろう。そして、伝統の絵ろうそくを大切な人へ供え手を合わせ、一足先に春を届けたい。



新しい形の絵ろうそく



和ろうそくの原料となる樫の実とイ草の茎



伝統の絵ろうそく